

〈論文〉

沖縄北部・金武方言の分節音韻論

玉 元 孝 治

本稿は、金武方言の分節音韻論を共時的体系として捉え、文法記述の基礎とするための包括的な記述を試みるものである。

なお、本稿で用いるデータは、基本的に筆者が2018年から継続して行っているフィールド調査で得られたものである。¹

1 はじめに

1.1 地理と系統

金武方言は、沖縄島のはほぼ中央に位置する金武集落と並里集落で話されている方言である。沖縄島及び周辺離島の言語は「北部諸方言」と「中南部諸方言」に大別されるが、金武方言はこのうち北部諸方言の系統に属する（ローレンス2006）。

流暢な話者の多くは1960年代以前に生まれた世代である。年齢別人口などから、話者数は1000人前後と推計される。

1.2 先行研究

金武方言の分節音韻論に関係する先行研究として、末吉（1987）と仲間（2000）がある。

末吉（1987）は、金武方言の音声的特徴の概要を示し、その歴史的変化について考察したものである。名護方言や今帰仁方言などでみられる「ハ行 p 音」「有気音と無気音の対立」「声門閉鎖音の有無による対立」が見られないことなどを金武方言の音韻的特徴として挙げている。

仲間（2000）は、金武方言のフォネム構造（分節音韻論）とリズム・アクセント（超分節音韻論）を分析し、沖縄島諸方言の中における金武方言の位置づけを論じたものである。金武方言の分節音韻論的特徴として、ハ行子音がh音に変化していること、カ行子音のh音への変化が見られないこと、喉頭化の有無による対立がないことなどを挙げており、金武方言のフォネム構造は「沖縄中南部諸方言的」とであると論じている。

これらの先行研究は、いずれも金武方言の音声・音韻的特徴を手掛かりとして、歴史的変化や系統的分類を論じることに主眼を置いたものであり、分節音韻論の包括的な記述を

1 インフォーマントは、1947年生まれのNK氏（男性）、1929年生まれのYT氏（男性）、YM氏（女性）、KM氏（女性）である。各氏とも並里区の出身である。補助的資料として、松森晶子氏からご提供いただいたアクセント調査の録音データと、語彙集『私の金武方言メモ』（池原2004）を利用した。

行う本稿とは目的を異にする。

1.3 本稿の理論的立場

本稿では、基底形式から表層形式を導出するプロセスの透明性を重視し、規則の段階的適用を認める生成音韻論（Chomsky and Halle 1968）の考え方を基調とする。

伝統的な用語法に従い、基底形式に現れる分節音を「音素」と呼び、表層形式に現れる分節音を「音声」と呼んで区別する。基底形式はスラッシュ '/' で、表層形式はブラケット '[' ']' で表示する。

2 音素目録

金武方言は、5個の母音と特殊モーラ /:/、2個の半母音、そして13個の子音を音素としてもつ。首里・那覇方言とは異なり、声門閉鎖音 [ʔ] は弁別的な分節音（音素）とは認められない。

母音と子音の各音素のチャートを以下に示す。金武方言の [u] は、日本語の「ウ」よりも円唇性が強い母音である。

(1) 金武方言の母音音素

	前舌	中舌	後舌
狭	i		u
中	e		o
広		a	

(2) 金武方言の子音音素および半母音音素

		両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
阻害子音	破裂音	p / b	t / d		k / g	
	摩擦音	h ^w	s / z			h
共鳴子音	鼻音	m	n			
	弾音		r			
半母音	接近音	w		j		

表層レベルで現れる [t͡ɕ] [d͡ʒ] [c] [z] [k^w] [g^w] [ç] [ʰ] [ŋ] [ɲ] などの音声は、上記の音素の異音または音声実現として処理する。

2.1 母音

2.1.1 長母音と短母音

各母音は長短で対立する（モーラ音素 /:/ については、2.2節を参照）。

(3) 長母音と短母音の対立

- /asa/[asa]「朝」 vs. /a:sa/[a:sa]「ヒトエグサ（海藻）」
 /ibi/[ibi]「海老」 vs. /ibi/[i:bi]「指」²
 /subu/[subu]「壺」 vs. /su:bu/[su:bu]「勝負」
 /ne-n/[ne:n]「ない」 vs. /ne:-n/[ne:n]「差し出す」
 /ki+momo/[ki:momo]「ケモモ（桃の一種）」 vs. /mo:mo:/[mo:mo:]「タカラガイ（貝）」

2.1.2 短母音の/e/と/o/

金武方言は、沖縄語の他の方言と同じように、祖語形の*e、*oに対応する母音がおおむね/i/、/u/に変化している。そのため、短母音の[e]、[o]が現れる語は少ない。

(4) 短母音の[e]を含む語

- /irera/[irera]「鎌」 /kage/[ka:ge]「陰」 /saka+nke/[sakanke]「ささくれ」
 /sude+guru/[sudeguru:]「抜け殻」 /haberu/[haberu:]「蝶々」

(5) 短母音の[o]を含む語

- /atjo+ju/[at̚coju:]「熱湯」 /ko:ro/[ko:ro]「香炉」 /saningo/[saningo]「月桃」
 /misona/[misona]「フダンソウ（野菜）」 /ja:tjo/[ja:t̚co]「灸」

短母音の/e/と/i/が対立するミニマル・ペアとして、[ka:ge]「陰」 vs. [ka:gi]「顔、容貌」が挙げられる。(5)に挙げた語の[o]を[u]に置き換えることはできないため、/o/は/u/とは別の音素と考える。一部の名詞では、[u]と[o]が自由に交替する。これらは基底の/u/の表層における自由異音と解釈する。以下、波線‘~’は、同一の基底形式の自由異音であることを示す。

(6) 音素/u/が[u]~[o]で自由に交替する語

- /azumu/[azumu]~[azomu]「杵」 /azumai/[azumai]~[azomai]「交差点」
 /kibusi/[kibuçi]~[kiboçi]「煙」 /sunui/[sunui]~[sonoi]「モズク」

2.1.3 *su・*zu・*tu・*duの母音

沖縄語の多くの方言では、祖語形の*s_u、*z_u、*t_u、*d_uに対応するモーラの母音が/i/に変化しているが（那覇方言の例:[çina]「砂」、[kizi]「傷」、[nat̚çi]「夏」、[mizi]「水」など）、

2 /ibi/[ibi]「海老」と/ibi/[i:bi]「指」は、アクセント型の対立でもある。/ibi/[ibi]「海老」がA型アクセントであるのに対し、/ibi/[i:bi]「指」は「C型」のアクセント型をもち、第1音節が長音化される（4.7節を参照）。

金武方言では次の例に見るように、この歴史的変化（*u→/i/）が起こっていない。

- (7) *suna > /suna/[suna] 「砂」 *natu > /natju/[nat̚ɕu] 「夏」
 *kizu > /kizu/[kizu] 「傷」 *midu > /mizu/[mizu] 「水」

2.2 モーラ音素 /:/

長母音については、同一母音の連続（VV）と見るか、母音とモーラ音素の組み合わせ（V:）と見るかという、二つの解釈がありうる。本稿では、モーラ音素 /:/ を認め、後者の立場を採る。

/:/ を音素として立てるのは、一部の接辞に /:/ という基底表示をもつものがある、という理由による。たとえば、〈真偽疑問〉の *kat̚ɕu:?* 「書く?」、*numi:?* 「飲む?」、*nuda:?* 「飲んだ?」などの形式に現れるムード接辞の基底表示を /:/ としないならば、/u/、/i/、/a/ という同一形態素の異形態を立てなければならなくなるが、当該形態素の基底表示を /:/ とすれば、そのような問題は生じない（金武方言の動詞形態論については、玉元2020を参照）。形態素の基底表示としてモーラ音素 /:/ の存在を認めるならば、長母音はすべて /V:/ と解釈するのが経済的である、というのが本稿の立場である。

2.3 半母音

半母音音素は、/j/ と /w/ の2つである。音節構造上、半母音は子音(C)とは異なるスロット(G)を埋める。オンセット位置で子音と共起して開拗音 /Cj/ または合拗音 /Cw/ を形成することができる（拗音については、3.2節で改めて取り上げる）。

/j/ は音節内ですべての母音と共起することができるが、/w/ が音節内で共起することができる母音は、非後舌母音である /i/・/e/・/a/ に限られる。

金武方言では声門閉鎖音 [ʔ] が弁別的な要素ではないため、首里・那覇方言のような /ʔj/ と /j/、/ʔw/ と /w/ の対立はない。首里・那覇方言では声門閉鎖音の有無で区別される [ʔja:] 「お前」と [ja:] 「家」、[ʔwa:] 「豚」と [wa:] 「私の」は、金武方言ではいずれも声門閉鎖音を伴わずに、[ja:]、[wa:] と発音される。

2.4 子音

2.4.1 /h/・/hʷ/

/h/ は、/i/ または /j/ の前では口蓋化されて [ç]、/u/ の前では両唇化されて [ɸ]³、その他の母音の前では [h] として実現する。

3 通時的には、ハ行子音が /p/→/ɸ/→/h/ と変化していく中で、/u/ の前に限って [ɸ] が残存したものと解釈することもできるが（査読者の指摘による）、本稿はあくまで共時的体系としての記述を企図しているため、この [ɸ] を /u/ の前の /h/ が両唇化されたものと解釈する。

(8) /h/の異音

[ç] : /hi/[çi:]「火」「屁」 /hjaku/[ça:ku:]「百」

[φ] : /huni/[φuni]「船」「骨」

[h] : /ha/[ha:]「葉」「歯」 /he:/[he:]「蠅」 /ho:tji/[ho:ti]「箸」

1892(明治25)年生まれの話者をインフォーマントとしている琉大方言研究クラブ(1970)には、金武方言の語彙として、[φisa]「足」、[φe:]「灰」、[φa:]「歯」などが記録されている。現在の話者がこのような発音をすることはほとんどないが、ある世代までは、/hi/・/he/・/ha/を[φi]・[φe]・[φa]と発音していたようである。1904(明治37)年生まれ、1907(明治40)年生まれの話者をインフォーマントとしている末吉(1987)は、[hi:]~[φi:]「火」、[he:]「灰」、[ha:]「歯」などの語彙を記録している。ハ行子音の[φ]→[h]の変化は、金武方言では明治末期から大正期ごろにかけて起こったものと思われる。

2.4.1.1 [φa]の音韻解釈

語例は少ないが、[φa]が音声として現れることがある。これらの[φa]を共時的体系の中でどのように解釈するかは慎重な検討を要する。一つの可能性として、合拗音の/kw/[kʷ]・/gw/[gʷ](3.2.2節)と同様に、子音+半母音の連続/hw/として解釈することが考えられる。しかし、[φa]は/kw/[kʷ]・/gw/[gʷ]よりも著しく語例が少なく、直後に立つ母音も/a/に限られるという特殊な分布を示す。そのため、本稿では/h/とは異なる音素/hʷ/を立て、これらの[φa]を/hʷa/の音声実現と解釈する。

収集できた限りでは、/hʷa/[φa]を含む語として次の5例がある。

(9) /hʷ/[φ]が現れる語の例

/hʷa/[φa:]「方角」⁴ /te:hʷa/[te:φa]「冗談」

/nuzihʷa/[nuziφa]「死者の靈魂を適切な場所に導く呪術」

/nzihʷa/[ndziφa]「役者が舞台に登場すること」

/irihʷa/[iriφa]「役者が舞台から退場すること」

2.4.2 /p/・/b/

/p/・/b/は、すべての母音の前で[p]・[b]として現れる(厳密には、/i/の前では口蓋化されて[pʲ]・[bʲ]として現れるが、以下では補助記号^ㇿの表記を省略する)。

祖語形の*pは、金武方言では/h/に変化しているため、オノマトペや外来語以外で/p/が語頭に現れる語は多くない。語腹では、撥音/n/の直後や、重子音として/p/が現れる語が多い。

4 /ni:=nu hʷa:[ni:nu φa:]「子(十二支)の方角」などの句で用いられる。

(10) 語頭の /p/ (オノマトペ・外来語以外)

/pa:pa:/[pa:pa:]「おばあちゃん」 /pu:pu:/[pu:pu:]「おじいちゃん」

/pi:tato:/[pi:tato:]「カマキリ」 /po:ruka:/[po:ruka:]「完熟したグアバの実」

(11) 語腹の /p/ (オノマトペ・外来語以外)

/kanpatji/[kampaŋci]「頭部の傷跡のはげ」 /a:tinpo:/[a:timpo:]「当てずっぽう」

/oppa/[oppa]「おんぶ」 /tuppe/[tuppe]「唾」 /sippun/[cippun]「吸う」

2.4.3 /t/・/d/・/k/・/g/

/t/・/d/・/k/・/g/は、すべての母音の前で[t]・[d]・[k]・[g]として現れる（厳密には、/i/の前では口蓋化されて[tʰ]・[dʰ]・[kʰ]・[gʰ]として現れるが、以下では補助記号 ʰ の表記を省略する）。

金武方言では、那覇方言でみられるような /d/ の弾音化（金城1944: 67）は起こらず、いかなる環境でも /d/ が [d] として現れることはない。

2.4.3.1 [tʰ] の音韻解釈

沖縄語の [tʰ] という音声の音韻解釈については、音素 /c/ を立てる立場（服部1955、下地1995ほか）と音素 /t/ の異音とする立場（宮良・新川1994、新永・青井2015ほか）がある。本稿では、音素 /c/ を立てずに、[tʰ] はすべて /tj/ という基底形式（または中間形式）から派生するものとする。金武方言には、語幹末が /t/ の動詞語幹に初頭音が /j/ の接辞（丁寧接辞の /-jabi-/ など）が付加する場合、/t/ を破擦音化して [tʰ] とする規則がある（例：/mat-jabi-ta-n/ → [matʰcabitʰan]「待ちました」）。この規則を一般化し、形態素内部の [tʰ] もまた /tj/ の破擦音化によって生じる異音と解釈するのである。つまり、[tʰca:]「いつも」、[kuʰci]「口」、[tʰcui]「一人」の基底形式は、それぞれ /tja:/、/kutji/、/tjui/ と表示される。/tj/ から [tʰ] を派生する破擦音化規則は、次のように定式化することができる。⁵

(12) 破擦音化規則



破擦音化規則は、後続する /j/ の [+high] 素性によって引き起こされる同化の一種と捉えることができる。/j/ に同化することにより、[t] を発音するときよりも舌の位置が高まり

5 本稿の「破擦音化」は、Chomsky and Halle (1968: 230ff.) で「口蓋化 (palatalization)」と呼ばれている規則と同種のものである。

([-high]→[+high])、結果として摩擦(きしみ)が生じる([-strident]→[+strident])。この規則は、オンセット(Onset)内で適用されることを条件としているため、/j/と同様に[+high]素性をもつ/i/が/t/の破擦音化を引き起こすトリガーとはなることはない。⁶

漢語由来の語に含まれるカ行開拗音も、ほとんどの場合[tɕ]として現れる。本稿では、カ行開拗音由来の[tɕ]は、基底形式そのものが通時的に*kjから/tj/に変化したものと解釈する。

(13) カ行開拗音由来の[tɕ]を含む語の例

/tjaku/[tɕaku]「客」 /zittju/[zittɕu]「月給」 /tjo:in/[tɕo:in]「教員」

語腹の/tju/は、話者によっては[tɕu]として実現することもある(例:/ti:tju/[ti:tɕu]~[ti:tɕu]「一つ」)。

2.4.4 /s/・/z/

/s/は、/i/の前では口蓋化されて[c]として実現し、/i/以外の母音の前では[s]として実現する(例:/sima/[cima:]「島」、/suna/[suna]「砂」、/saki/[saki]「酒」)。

/z/は、語腹では[z]~[ɹ] (/i/の前では[ɹ])として実現する。語頭または/n/の直後では破擦音化して[dz]~[dʒ] (/i/の前では[dʒ])として実現する。

(14) /z/の異音

[z]~[ɹ] : /aza/[aza]~[aza]「瘡」 /mizu/[mizu]~[mizu]「水」 /kazi/[kazi]「風」

[dʒ]~[dʒ] : /za:siki/[dʒa:ɕiki]~[dʒa:ɕiki]「座敷」 /unzi/[undʒi]「恩義」

語頭の/s/には、*ti、*tu、*tj、*kjの摩擦音化(非破擦音化)によって通時的に生じたものがある(例:/si/[ci:]「血」、/subu/[subu]「壺」、/sa/[sa:]「茶」、/su:/[su:]「今日」、/so:de:/[so:de:]「兄弟」)。これらの/s/は、語頭で/tj/[tɕ]と対立するため(例:/tji:/[tɕi:]「つるべ」、/tjui/[tɕui]「一人」、/tja:/[tɕa:]「いつも」、/tjottjo:/[tɕottɕo:]「ウグイス」)、共時的な規則を仮定してこれらの[s]を/t/の異音とすることは適当ではない。⁷

6 破擦音化規則を仮定することで、動詞/mat-/「待つ」の命令形[matɪ]「待て」と不定形(連用形)[matɕi]「待ち」の基底形式は、それぞれ/mat-i/、/mat-ji/と表示しわけることができる。したがって、「待つ」という一つの語彙素に対し、複数の語幹(服部1955の「基本語幹」「連用語幹」など)を設定する必要もなくなる。

7 *tja、*tjoから通時的に変化した/sa/、/so/と、[tɕa]、[tɕo]として現れる/tja/、/tjo/の違いは、今帰仁方言の有気音と無気喉頭化音の対立に相当する(今帰仁方言:[tɕ^ha:]「茶」vs.[tɕ^ha:]「いつも」)。今帰仁方言は有気音[tɕ^h]の非破擦音化の過程にあるようで、『今帰仁方言辞典』(仲宗根1983)の「チャーcaa」(茶)の項には「サーともいう」と付記されている。

2.4.5 /n/・/m/・/ɾ/

/n/、/m/、/ɾ/は、すべての母音の前で[n]、[m]、[ɾ]として現れる（厳密には、/i/の前では口蓋化されて[n^j]、[m^j]、[ɾ^j]として現れるが、以下では補助記号⁹の表記を省略する）。語頭の/ɾ/は、[d]として現れることが多い（例：/ranpu/[rampu]~[dampu]「ランプ」、/ro:/[ro:]~[do:]「ろうそく」）。

/n/は、促音として現れる無声子音以外で、音節構造上のコーダ位置に現れることができる唯一の子音である。コーダの/n/は、語尾では[n]として実現し、語尾以外では調音位置が直後の子音に同化して[n]または[ŋ]、[m]として実現する（例：/anda/[anda:]「油」、/hingui/[çingui]「垢」、/gunbo/[gumbo]「ごぼう」）。/n/は、金武方言では唯一の成節子音でもある（3.1.2節）。

3 音節構造と音素配列

金武方言の音節構造のテンプレートを以下に示す。Cは子音（consonant）、Gは半母音（glide）、Vは母音（vowel）を表す。（ ）内の要素は、随意的な要素であることを示している。

(15) 金武方言の音節構造

$$[\sigma [\text{Onset } (C) (G)] [\text{Nucleus } V_1 (V_2)] [\text{Coda } (C)]]$$

金武方言の音節は、オンセット（Onset）と音節核（Nucleus）からなる開音節を基本とする。V₁、V₂、およびコーダ（Coda）は、それぞれ1モーラとしてカウントされる。1音節の長さは最大3モーラである。

3.1 音節核

音節核は、音節に欠くことのできない義務的な要素である。V₁にはすべての母音が現れるが、V₂の位置に現れる音素は、/i/か/:/に限られる。語頭音節では、成節子音/n/が音節核を担うこともある。

3.1.1 二重母音

[ai]・[ui]・[oi]の母音連続は、一つの音節の核を構成する二重母音とみるべきか、あるいは別個の音節に属する連母音（hiatus）とみるべきかが問題となる。本稿では、これらの母音連続が一つの音節に属する二重母音であるとする立場をとる。以下にその理由を述べる。

金武方言の名詞のアクセントは、3つの型の区別をもつ（それぞれのアクセント型を「A型」「B型」「C型」と称する）。松森（2009）が指摘するように、金武方言のA型アクセントをもつ3モーラ以上の語⁸は、「語頭から数えて3つめのモーラの直後にピッチの下が

り目が現れる」という一般化が成り立つ（以下の例において、¹はピッチの下がり目を示す）。

- (16) A型アクセントの4モーラ名詞（句）【音調パターン：HHHL】

[sani¹ go]「月桃」 [ci¹deku ni]「にんじん」 [sanci¹ ri]「三線」

しかし、4つめのモーラが3つめのモーラと同じ音節に属する場合（たとえば4つめのモーラが長音や撥音の場合）、ピッチの下がり目は、4つめのモーラが属する音節の直後に移動する。

- (17) 4つめのモーラが長音 /:/ のA型アクセント名詞（句）【音調パターン：HHHHL】

[agi+ma:¹ mu]「里芋」 [hazi+ba:¹ ja]「軒を支える柱」

- (18) 4つめのモーラが撥音 /n/ のA型アクセント名詞（句）【音調パターン：HHHHL】

[ɸuja+dam¹ pu]「ほやランプ」 [akazin¹ =nu]「スジアラ（魚）の」

この一般化は、語の3つめのモーラが[a]、[u]、[o]のいずれかで、4つめのモーラが[i]である場合にも妥当する。

- (19) 4つめのモーラが /i/ のA型アクセント名詞（句）【音調パターン：HHHHL】

[katamai¹ =nu]「かたまりの」 [hingu¹i =nu]「垢の」 [bottoi¹ =nu]「太った人の」

このことから、[a]、[u]、[o]の後に現れる[i]は、長音 /:/ や撥音 /n/ と同じように、直前の母音とともに一つの重音節を構成する要素と認定することができる。⁹

3.1.2 成節子音

/n/は成節子音であり、語頭音節では母音を伴わずに核を担うことができる。金武方言では、語頭の子音連続*CCが許容されないため、[ɲi]「胸」、[ɲmatu]「港」などの語頭の/n/は、オンセットにおける子音連続ではなく、1つめの/n/が2つめの/n/とは異なる音節を構成するものと解釈するのが妥当である。音節核を担う/n/は、語のアクセント型に応じて、母音と同じように長音化規則（4.7節）の適用を受ける（例：/ɲtja/[ɲtɕa:]「土」、

8 以下において「語」とは、単純語のみならず、複合語や助詞付き名詞など、アクセント付与の単位となる「音韻語（phonological word）」を指すものとする。

9 音調パターンの付与において、二重母音が一つのまとまりとして扱われるのは、ピッチの「下降」が関わる場合に限られる（松森晶子氏（私信）のご指摘による）。たとえば、C型アクセントを持つ語は、語末モーラのピッチが上昇するが（cf. [ha:¹ ma]「浜」、[kiri¹ bu]「みかん」）、語末音節が二重母音[ai]・[ui]・[oi]の場合は、[i]のピッチだけが上昇する（cf. [suda¹ i]「簾」、[kusu¹ i]「薬」、[sono¹ i]「モズク」）。

/ɾna/[ɾna:]「巻き貝」、/ɾnu/[ɾnu:]「蓑」など)。

成節子音/n/は、2音節以上の語の語頭音節にのみ現れるという制約がある。したがって、成節子音のみからなる語は存在しない。また、成節子音の直後にはオンセットを伴った音節が要求される。

3.2 オンセット

オンセットの位置には、一つの子音C、または一つの半母音G、あるいは子音と半母音の連続CGが現れうる。オンセットを伴わない母音だけの音節も存在する。

3.2.1 開拗音

オンセットの位置で子音Cと半母音/j/が連続する音声パターンを開拗音という。

/tj/が[tɕ]として実現することは、2.4.3.1節でみたとおりである。音声レベルで開拗音Cjが現れるのは、ごく一部の語に限られる。

(20) /tj/以外の開拗音/Cj/を含む語の例

/hj/[ɕ] : /anu hja/[anu ɕa]「あの野郎」 /hju:nai/[ɕu:nai]「ヒューっと」

/bj/[bj] : /sanbjaku/[sambʲaku]「三百」 /ajabjo:/[ajabʲo:]「あらまあ」

/pj/[pj] : /happjaku/[happʲaku]「八百」

/kj/[kj] : /kju:i/[kʲu:i:]「きゅうり」¹⁰

日本語からの借用語や外来語などでサ行・マ行・ラ行の開拗音を含む語は、金武方言では直音化して現れる。

(21) 借用語の開拗音Cjが直音化して現れる語の例

sj→/s/ : /sasin/[sacɪn]「写真」 /basa/[basa]「馬車」 /so:ju/[so:ju:]「醤油」

mj→/m/ : /maku/[ma:ku:]「脈」

rj→/r/ : /rukwan/[rukʷan]「旅館」 /ru:matjisu/[du:matɕisu]「リユーマチ」

3.2.2 合拗音

オンセットの位置で子音Cと半母音/w/が連続する音声パターンを合拗音という。オンセットで/w/と共起することができるのは、軟口蓋子音 (/k/・/g/) に限られる。また、合拗音の後に現れる母音は非後舌母音 (/i/・/e/・/a/) に限られる。これは、半母音/w/と共起できる母音の分布と同じである (2.3節)。

/kw/、/gw/は、音声レベルでは唇音化子音[kʷ]、[gʷ]として実現する。

10 [kʲ]が音声として現れるのは、管見の限り[kʲu:i:]「きゅうり」の一語のみである。

(22) 合拗音[C^w]を含む語の例

/kwi/[k^wi:]「声」 /kwe/[kwe:]「楳」 /kwasi/[k^wa:çi]「菓子」
 /magi+gwi/[magi+g^wi]「大声」 /hira+kwe/[çira+g^we]「平楳」
 /gwansu/[g^wansu]「位牌」

3.3 コーダ

コーダ (Coda) の位置に立ちうる子音は、/n/ (撥音) か、/h/ 以外の無声子音 (促音) に限られる。/n/ は語末音節か非語末音節かを問わずコーダ位置に立つことができるが、無声子音 (促音) は語末音節には現れない。

本来は撥音 /n/ で閉じる漢語由来の語の末尾に、母音 /u/ を挿入して /nu/ を独立した音節とし、語末の閉音節を回避した語の例も多くみられる。¹¹

(23) /so:dan/ → [so:danu]「相談」 /so:min/ → [so:minu]「そうめん」
 /higan/ → [çiganu]「彼岸」 /mumin/ → [muminu]「木綿」

4 音韻規則

4.1 連濁

連濁は、複合語の後部要素となる語の、語頭の無声阻害音 (清音) が有声阻害音 (濁音) に変わる現象である。連濁がかかわる阻害音の対は、h/b、t/d、k/g、s/z の4つである。

(24) 連濁の適用例

/h/ → [b] : /aka/「赤」 + /hana/「花」 → [aka+ba:na:]「ハイビスカス」
 /t/ → [d] : /usu/「臼」 + /te:ku/「太鼓」 → [usu+de:ku]「臼太鼓」
 /k/ → [g] : /aka/「赤」 + /ka:ra/「瓦」 → [aka+ga:ra]「赤瓦」
 /s/ → [z] : /kuru/「黒」 + /sa:ta/「砂糖」 → [kuru+za:ta]「黒砂糖」

後部要素の基底形式に有声阻害音が含まれる場合、連濁は適用されない (いわゆるライマンの法則)。また、前部要素と後部要素が並列関係になっている複合語 (dvandva) や、前部要素と後部要素が項 + 動詞派生名詞の関係になっている複合語でも連濁は適用されない。

(25) 連濁が適用されない複合語の例

a. 後部要素に有声阻害音が含まれる複合語 (ライマンの法則)

/ujame/「敬い」 + /kutuba/「言葉」 → [ujame+kutuba]「敬語」 cf. *[ujame+gutuba]
 /jama/「山」 + /sigutu/「仕事」 → [jama+çigutu]「山仕事」 cf. *[jama+zigutu]

11 これらの語の多くは、語末モーラのピッチが上昇する「C型」のアクセント型をもつ。

b. 前部要素と後部要素が並列関係の複合語

/uja/「親」+/kkwa/「子」→[uja+kk^wa]「親子」 cf. [aka+ŋg^wa]「赤ちゃん」
 /ni:sa/「遅さ」+/he:sa/「早さ」→[ni:sa+he:sa]「遅さ早さ」 cf. [t̪ɕui+be:sa]「早熟」

c. 前部要素と後部要素が項+動詞派生名詞の複合語

/ami/「雨」+/hui/「降り」→[ami+ɸui]「雨降り」 cf. [atta+bui]「急な雨降り」
 /bo:/「棒」+/suke/「使い」→[bo:+suke]「棒術」 cf. [it̪ɕand̪za+zuke]「無駄遣い」

4.2 語頭重子音の非重子音化と再音節化

[t̪ɕu:]「人」、[k^wa:]「子」、[k^wen]「食う」が複合語の後部要素となる場合、要素境界に重子音が現れることがある。

(26) 複合語の要素境界に現れる重子音

[uɸu+tt̪ɕu]「大人」 [uja+kk^wa]「親子」 [muɕi+kk^we]「(衣服などの)虫食い」

これらの例から、[t̪ɕu:]「人」、[k^wa:]「子」、[k^wen]「食う」の基底形式は、語頭重子音が含まれる /ttju/、/kkwa/、/kkwen/ であると考えられる。

金武方言では音節構造上、オンセット位置の子音連続*CCが許容されないため、基底形式において語頭重子音を含む語が単純語として現れる場合、語頭重子音の一つめの子音が脱落する。しかし、基底形式で語頭重子音を含む語が複合語の後部要素となる場合、語頭重子音の一つめの子音は、前部要素となる語の語末音節のコーダとして再音節化され、音声的に重子音として実現することが可能となるのである。

4.3 3モーラ以上の前部要素と複合する後部要素の語頭重子音 /tt/ に適用される鼻音化

前節では、/ttju/「人」という語が複合語の後部要素として現れる場合、語頭重子音の /tt/ が音声的に現れることを見たが、この現象がみられるのは、複合語の前部要素が2モーラ以下の場合に限られる（例：/sini+ttju/[ɕini+tt̪ɕu]「死人」、/jami+ttju/[jami+tt̪ɕu]「病人」など）。複合語の前部要素が3モーラ以上の場合、語頭重子音 /tt/ の一つめの子音は、鼻音化して現れる。¹²

(27) 語頭重子音 /tt/ の一つめの子音が鼻音化して現れる複合語の例

/sutumi/「勤め」+/ttju/「人」→[sutumi+n̪t̪ɕu]「勤め人」
 /kasugi/「妊娠」+/ttju/「人」→[kasugi+n̪t̪ɕu]「妊婦」
 /we:ki/「裕福な家」+/ttju/「人」→[we:ki+n̪t̪ɕu]「お金持ち」

12 /tt/の鼻音化は、複合語の場合に限って適用される。複合語以外の環境では、CVCVCVt̪ɕV という音連続自体は許容される（例：/siranu # ttju/[ɕiranu t̪ɕu:]「知らない人」）。

4.4 語頭重子音 /kk/ が連濁するときに適用される鼻音化

語頭重子音 /kk/ は、連濁の適用を受ける。その場合、一つめの子音は鼻音化して [ŋ] となる。これは、音素配列上許容されない有声子音の連続 *[gg] を回避するための異化規則と考えられる。¹³

(28) 語頭重子音 /kk/ の連濁

/aka/ 「赤」 + /kkwa/ 「子」 → [aka+ŋg^wa] 「赤ちゃん」

/gatji/ 「餓鬼」 + /kkwe/ 「食い」 → [gatci+ŋg^we] 「つまみ食い」

4.5 重子音が後続する長母音の短母音化

複合や接語の付加によって、長母音 V: と重子音 CC が連続する場合、重子音の再音節化と同時に、長母音の短母音化が起こる (*V:C.C → VC.C)。これは、音節構造上許容されない V:C (C は /n/ 以外の子音) という 3 モーラ音節を回避するために適用される規則である。

(29) /i:/ 「良い」 + /kkwa/ 「子」 → [i+kk^wa] 「いい子」

/i:/ 「良い」 + /ttju/ 「人」 → [i+ttc^u] 「いい人」

/bo:/ 「棒」 + /ttji/ 「〜で」 → [bo=ttci] 「棒で」

4.6 1 モーラ語の長母音化 (最小語制約)

他の琉球諸語と同じように、「語は最小でも 2 モーラの長さがなければならない」という最小語制約が金武方言にも存在する。基底形式で 1 モーラの長さしかない語は、表層形式では長音化される。

(30) /ki/ [ki:] 「木」 /ta/ [ta:] 「田んぼ」 /ha/ [ha:] 「葉」「歯」 /hi/ [çi:] 「火」「屁」

4.7 アクセント型に応じた母音および成節子音の長音化

アクセントや音調は本稿が扱う範疇ではないが、金武方言ではアクセント型に応じて、母音または成節子音の /n/ が長音化する傾向が顕著であるため、ここでふれておきたい。

B 型アクセントをもつ語は、語末モーラが規則的に長音化される。また、2 音節語の場合は、第 1 音節も長音化することが多い。¹⁴

13 音節構造上、オンセット位置の子音連続 *CC は許容されないため、鼻音化された [ŋ] は前の音節のコーダとして再音節化されるものと考えられる。この音韻現象から、複合 → 連濁 → 鼻音化 → 再音節化という規則の適用順序を想定することができる。

14 B 型アクセントをもつ語で第 1 音節が長音化しない例外的な語も少なからず存在する (例: [kusa[↑]] 「草」、[cinu[↑]] 「衣服」、[ɸuka[↑]] 「外」など)。

(31) B型アクセントをもつ3音節以上の語

/kuruma/[kuru^ˈma^ˈ]「車」 /nukuziri/[nukuzi^ˈri^ˈ]「のこぎり」

(32) B型アクセントをもつ2音節の語

/ami/[a:^ˈmi^ˈ]「雨」 /naji/[na:^ˈi^ˈ]「果実」 /ɲa/[ɲ:^ˈna^ˈ]「巻き貝」

これらの語に含まれる長母音が音韻規則の適用によって派生するものと考えるのは、これらの語が複合語を構成する要素となる場合、短母音で現れることがあるからである。¹⁵

(33) 単純語ではB型アクセントをもつ語が短音で現れる複合語の例

/ami/「雨」+/kumu/「雲」→[ami+gumu:]「雨雲」 cf. [a:mi:]「雨」

/basa/「芭蕉」+/nai/「実」→[basa+nai]「バナナ」 cf. [nai:]「果実」

/ɲa/「巻き貝」+/guru/「殻」→[ɲa+guru:]「貝殻」 cf. [ɲ:na:]「巻き貝」

C型アクセントをもつ語のうち、2音節の語は第1音節がほぼ規則的に長音化する。¹⁶

(34) C型アクセントをもつ2音節の語

/susu/[su:^ˈsu]「煤」 /nabi/[na:^ˈbi]「鍋」 /hama/[ha:^ˈma]「浜」

謝辞

初期の草稿にコメントをくださった松森晶子氏、下地理則氏、松浦年男氏、黒木邦彦氏、サルバトーレ カルリノ氏、占部由子氏、松岡葵氏にこの場を借りて御礼申し上げます。本稿に含まれるデータの不備や分析の誤りは、すべて筆者の責任である。

引用文献

Chomsky, Noam and Morris Halle (1968) *The Sound Pattern of English*. Harper and Row.

池原弘 (2004) 『私の金武方言メモ』 私家版

金城朝永 (1944) 『那覇方言概説』 三省堂

新永悠人・青井隼人 (2015) 「沖縄久高島方言の特殊な舌頂音の音声記述と音韻解釈」『方言の研究』1, 325-352.

下地良男 (1995) 「中舌母音音素 /i/ 設定に関する一考案」『琉球の方言』18/19, 181-189.

末吉武光 (1987) 「金武方言特徴の概要——音韻を中心にして」琉球方言研究クラブ30周年

15 この傾向は、B型またはC型のアクセント型をもつ名詞が複合語の前部要素となる場合に特に顕著である。

16 C型アクセントをもつ2音節語で、第1音節が長音化しない例外もいくつか存在する（例：[ki^ˈnu]「昨日」、[ɸu^ˈni]「船」、[ɸu^ˈru]「便所」など）。

- 記念会（編）『琉球方言論叢』琉球方言論叢刊行委員会
- 玉元孝治（2020）「沖縄北部・金武方言の動詞形態論」『琉球の方言』44, 35－67.
- 仲宗根政善（1983）『沖縄今帰仁方言辞典』角川書店
- 仲間恵子（2000）「沖縄本島北部金武方言——その位置づけ」『琉球アジア社会文化研究』3, 72－102.
- 服部四郎（1955）「琉球語（IV.音韻体系～V.文法）」市河三喜・服部四郎（編）『世界言語概説 下巻』318－353, 研究社
- 松森晶子（2009）「沖縄本島金武方言の体言のアクセント型とその系列——「琉球調査用系列別語彙」の開発に向けて」『日本女子大学紀要・文学部』58, 97－122.
- 宮良信詳・新川智清（1994）「沖縄本島与那原方言における中舌高母音音素 /i/ について」『言語研究』105, 1－31.
- 琉大方言研究クラブ（1970）「「沖縄本島南部北部方言の境界」を見つけるために——主として音韻と語彙の面から」『琉球方言』11, 3-53.
- ローレンス ウェイン（2006）「沖縄方言群の下位区分について」『沖縄文化』40, 101－118.